

最も幸せな男のシャツ

シンドゥ・ポーターによる再話

何世紀も前のこと、地中海の沖合にある小さな町に、真理の探究者が住んでいました。彼の名はアンジェロで、働き者で愛情あふれる家庭に生まれました。

本来ならば、このような美しい場所に親切な人々と住み、彼は幸せであるはずでした。しかし彼は幸せではなかったのです。日の出に、家の近くの柔らかい空色の海辺を歩いても、アンジェロの心は晴れませんでした。

小さな子どもの頃から、アンジェロは振り払うことのできない苦悩にさいなまれてきました。

ある日、町で祭りが行われていました。家族や子どもたちが集まる季節の集いです。好奇心から、アンジェロは行くことに決めました。

到着すると、明るい色の服を着た曲芸師が芝生の上を跳ねていました。そして芸人が観衆を大いに楽しませ、笑いのどよめきが起こっていました。空は晴れ渡り、空気は新鮮で、太陽の光が輝いていました。

アンジェロは喝采して笑っている友人たちから離れて立っていました。

その日の愉快さは、多くの場合と同じように、彼のすぐそばをすり抜けました。

彼はその祝祭から歩き去りながら、「幸せになる方法を見つけることさえできれば…」と物思いに沈みました。

その日、後になって、近くの港を歩いていると、彼は一人の僧の聖人に会いました。彼は遠くの国から着いたばかりのようでした。その聖人はやって来る船を停泊させるための木のくいに静かに座っていました。

この見知らぬ人のそばを通り過ぎようとした時、アンジェロは持っていた小さな皮の袋を偶然落としてしまいました。それは僧の足元に着地し、アンジェロがそれを取り上げようと身をかがめると、その老人と目が合いました。

僧の視線は深く若者の魂を見詰めました。

アンジェロはその日の早くに自分が願ったことを思い出しました。そして僧を見た時、自分が求めていた喜びを垣間見ました。

「あなたはどなたですか」と、アンジェロは尋ねました。「私は真の幸福をあなたの目の中に見ました。私を助けてくださいますか。私は、あなたの中に映し出された幸せが欲しいのです」

僧は黙っていました。それから彼はアンジェロを見ると、答えました。「この幸せへの鍵を見つけるためには、ここから遠く旅しなければならない。その旅は長いが、たゆまずに続けるなら、結果は満たされるものになるだろう。東洋に、二つの頂きのある山の頂上に住んでいる聖人がいる。彼が着ているシャツをもらいなさい。そしてそのシャツを着ると、おまえも幸せになるだろう」

その男と、それにもまして、彼のシャツを見つけることへの期待が、アンジェロに希望をもたらしました。シャツが「幸せ」をもたらすというのは少し奇妙でしたが、彼はその可能性に駆り立てられました。

数日後、彼は船に乗り、そのシャツとそれを着た男を探しに出ました。

何カ月も、アンジェロはその約束された幸せな男を探し、長い距離を旅しました。

トルコの海岸沿いで、彼は幸せな男とうわさされる人物を見つけ、勇気づけられました。アンジェロはその男に近づき尋ねました。「お願いします、ご親切なお方。あなたは真に幸せに見えます。あなたのシャツを私が着ることを許してくだされば、私は幸せを見だし、焼けるような心の痛みが静まります」。

男はアンジェロの頼みを理解しているようでした。彼は親切にうなずいて言いました。「実のところ、そのためには、もっと遠くへ旅しなければならない。エジプトにとっても賢い人物がいる。彼は幸せにあふれているので、彼ならばきっと、あなたの求めるものをくれるだろう」

しかし、何百マイルも旅してエジプトへ行っても、そのような幸せな男が見つからず、アンジェロはがっかりしました。

カイロの混み合った市場をさまよいながら、決意を新たに固めると、彼は香りの良い香辛料が積み上げられた店に引き寄せられました。それらに鼻を近づけ、香りを吸い込みながら見上げると、賢く、真に幸せな男が近くに座っているのが見えました。彼は真っすぐにこちらを見ていました。なんと運が良いのでしょうか！

アンジェロはその機会を逃さずに、その男へ近づき頼みました。「あなたがここにいらっしゃることは祝福です！ あなたは真に幸せなお方に見えます。どうか私にあなたのシャツを着させてください。そうすれば幸せが、私の内側を占めるようになるでしょう」

その男はしばらく考え、言いました。「ああ、分かった！ もっと東へ行きなさい。きっとあなたは探しているゴールにたどり着ける。疑いなく、幸せのシャツとそれを着た男があなたを待っている。そのシャツを着ると、あなたが求める果てることのない幸せで満たされるだろう」

そこで、アンジェロは先へと旅を続けました。ゴールに焦点を合わせ、陸や海を旅し、山を登り、たくさんの都市や人里離れた村を訪れました。彼が通った国々は数え切れませんでした。30年もの長い間、彼はくじけることなく続けました。

アンジェロは旅をしながら、話に聞いたシャツを思い描きました。ついにそのシャツを手に入れ肩に掛けたらどんな気持ちになるだろう、その柔らかな衣服は長く待ち望んでいた安らぎを与えてくれるだろうか、と思いました。彼はそれが自分という存在を軽やかさで満たしてくれることを想像しました。時がたつにつれて、そのシャツのイメージは彼の意識の中でとても鮮やかになり、ほとんど触れることができそうなくらいでした！

少しずつ、アンジェロも気づかないうちに、彼の苦悩は消え始めていました。時々、喜びの一端が、長く疲れた心の岸辺に触れるのを感じました。彼は高まる情熱に満たされ、決して消え去ることのない幸せをもたらしてくれる人物を探して、新しい場所に向かうのでした。

ある日、松林の奥深くにある小川のそばを通っていた時、前方で大きな笑い声が聞こえました。その笑い声は、あたかもその近くの川床で水が波打つように、空中をさざ波のように伝わって来ました。アンジェロは、その音に引かれて追って行きました。

笑い声は何マイルも続き、彼を先へと誘いました。笑いの波は、より一層大きく強くなりました。

アンジェロは、彼自身の身体の内側で、その際限ない笑い声が波打つを感じ始めました。精神が高揚し、歩くたびに足取りが軽くなっていくのが感じられました。

その笑い声は彼を前進させ、ついに彼は山の麓にたどり着きました。その山を見上げると、とても珍しいことに気づきました。その山には、一つではなく、二つの頂きが空にそびえていたのです。

これでした！ 二つの頂きがある山です！ ついに彼のゴールに手の届く所まで来たのでしょうか？ ここが賢人の——そしてそのシャツを見つけられる場所なののでしょうか？

彼はすぐさま山を登り始めました。

アンジェロが幾つもの山道や溪谷、尾根を進み、上へ上へと登るにつれて、波打つ笑い声は大きくなりました。それは、まるで音の波が彼に降り注ぎ、彼を包み込んでいるかのようにでした。

アンジェロはついに山の頂きにたどり着きました。

彼はそこに小さな僧院を見つけました。この小さな僧院の外が音の源でした。

それは一人の賢人でした。その抑え難い大笑いは、彼という存在のすべての粒子から発せられていました。色とりどりの、着古したショールが一枚肩に掛けられていました。

身体を前後に揺らしている賢人の前に進み出ると、アンジェロはひざまずき、その陶然とした聖人に尋ねました。

「お願いします。私はあなたを見つけるためにはるか遠くまで旅をして来ました。あなたのシャツを着たら、それが私に幸せをもたらすと言われたのです。どうかそれを私にくださいませんか？」

その問い掛けはより一層の笑いと歓喜で迎えられ、それは同時にアンジェロにも広がったようでした。

アンジェロは自分の顔に笑みが浮かんでいるのを感じました。

その時、彼は思い出しました。「シャツだ！ 幸せに満ちたシャツを羽織らなければ、私は果てることのない幸せを手にはできない！」

そこで、彼はもう一度問い掛けました。

「お願いします。あなたのシャツを私にくださいませんか？」

肩に掛かったショールの下を指しながら、賢人はついに答えました。「しかしご覧の通り、私は全くシャツを着ていないのだよ」

アンジェロがその驚くべき言葉を聞いた時、彼の苦労と苦難の年月が目の前をよぎりました。

「なんですか？ そんなばかな」と、彼は信じられずにつぶやきました。「30 年も費やしたのに——シャツは無かった！」

彼は目を上げると、再度、彼の前に座る輝く存在のまなざしに出会いました。

その時です。アンジェロは、彼の前にいるその聖人は、まさに、あの僧だと気づきました——
ずっと前のあの時に彼をこの旅に乗り出すよう促した、まさにその人物だったのです。

「おお、賢人よ、あなただったのですね！」と、アンジェロは叫びました。「どの人物もあなただったのですね。でも私には分かりません。なぜあなたはこの旅——存在しないシャツを探し求める旅——に私を送り出したのですか」

この質問に僧は、新たに大笑いをしました。ようやく、僧は笑うのを止めると言いました。「話してごらん、息子よ。あなたは幸せではないのかい」

アンジェロは一瞬、黙りました。それは真実でした——彼は心が軽く感じるようになっていました。彼はもはや過去の重さを引きずってはいないようでした。

その僧は再び話しました。「30 年間、あなたは幸福への願いだけを心の中に持ち続けてきた。30 年間、心をそのことだけに集中させてきた。あなたの一步一步が、あなたがささやいた祈りの一つ一つが、この山頂にあなたを連れてきたのだ。そして、この場所に到着した時には、あなたは完全に心を開いていた。最後にこの山を登った時に、あなたの心の扉は一気に開いたのだよ。息子よ、今、この瞬間に、あなたの心の中に何が住んでいるのかを見なさい」

アンジェロは彼の注意を内側に向けました。

内側で、彼の存在の全ての細孔を貫いて放射していたのは、喜びでした——無限の、そして、まさに本物の。

彼は目を閉じてそれを楽しみました。



© 2020 SYDA Foundation®. 著作權所有。